

「熊本地震から1ヶ月経過して」

公益社団法人 熊本県精神科協会 理事 横 田 周 三

この度の熊本地震により被災された皆様ならびにそのご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

私の中で、4月14日、16日の熊本における2回の地震は、予想しない形で平成28年度の幕があいた、という印象が残りました。私はまさか、という出来事に思考が少し固まり、普段の日常の様に数日経過してしまいました。会員病院の中には患者さんの一時的な避難が必要だった施設などもありましたが、各医療機関、福祉、行政、自衛隊、更には他県からの派遣等の協力のお蔭もあり、震災の超急性期の時期は暫くすると過ぎ去って行った感じがしています。

現在、熊本地震が起きてから約1ヶ月経過した時点ですが、まだ県内には1万人の方が避難されており、会員病院のスタッフの中にも避難所、車中泊、震災関連疾病で苦しんでいらっしゃる方も少なからず居られると伺っています。個人的には、被害の大きかった会員病院への主体性をもった支援が直接的には出来ていない中、逆に他所の地域の同期や先輩後輩等からの安否確認や暖かい励ましの電話やメールなど戴きながら、自分の中では、普段の診療を優先させ、何処か、誰かからの、指示待ちをしていた様な自分が腹立たしく情けなく、何もしていないといった罪悪感を感じる事もありました。ただ、どうしようもない事もある、目の前の事を成していくだけ、今から必要になる事もある、と頭では考えていても、複雑な感情のまま経過している自分に気づかされました。個人的には、今は流され過ぎずに、今から先の事を考えながら、“自分が出来る支援”を見つける事が出来、要望が上がった時には私自身が動き出せれば、と思っています。

県北にある私どもの病院では、幸い大きな被害は受けずに、電気と水道が暫く停止しただけでライフラインは復旧しました。病院3階の精神科一般病棟の中にある児童思春期ユニットエリアでは、震災当日の夜も小学生、中学生年代のお子さんが入院されていましたが、男の子の方が泣きだしたりして（女の子は泣かなかった様でした）、部屋で眠れずに10人程度が布団を部屋から持ち出し、“デイルームで布団を敷いて寝たい”と子供たちが主張するのを夜勤の看護スタッフがなだめつつ部屋に戻し、そして又、余震が来ると布団を持って舞い戻ってくる、のやり取りを数回繰り返してスタッフも疲弊していた様です。その後はスタッフが折れる形で許可を出したとの事で、朝私が病棟に行くと、デイルームのテーブルの下に潜り込み、それぞれ寄り添いあいながら、熟睡していました。スタッフも対応に追われながらも少し混乱気味になっていたとの事でした。そんな地震直後に一般病棟エリアに長期入院中で陰性症状が強くなってこられている高齢の女性患者さんが落ち着いた感じで歩いて来られて「何か地震があったみたいだね」とゆっくりと自室に帰る姿、その立ち振る舞いを見ながら、スタッフも我に返り、落ち着きかけを作ってもらえたとの事を聞いて感心しました。震災の様な非日常的な出来事は突然で驚く事が多いのですが、その中でも日常の中では気づけなかった、或は普段は我々が気づこうとしていなかった事象も再確認出来る機会があるのかも知れない、と感じました。

私自身、どこか落ち着かない感じは続いています。取り敢えず日常にある課題に対峙して行きながら、安全について考えて行きたいと思っています。